会報

創刊号
1992. 9. 30
新潟大学
理学部同窓会

新潟大学 理学部同窓会誕生

会報発行にあたって

会長　渡辺昌吾
（化学科第一回卒業）

残暑厳しい折、同窓生の皆さんにはますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

先の発足総会には、ご多忙のところ、遠路多数のご出席を頂き、ありがとうございました。遅ればせながら、ここに厚くお礼申し上げます。

さて、発足総会において会長に御推挙頂きました。何の取り柄もなく馬齢のみ重ねております小生ですが、理学部同窓会の発展のために、少しでもお役に立てればと思いお引き受け致しました。よろしくお願い致します。

ご承知のように、理学部卒業生が少数であった頃、各科統合の理学部同窓会が存在いたしましたが新潟大学の発展と共に、卒業生の大幅な増加・種々分野でのご活躍がみられるようになり、より効率良い対応が求められ各科毎の同窓会に移行致しました。それから十数年経過し、当然のことではありますが、各科内の絆に比べ理学部全体としての絆は予想以上に疎遠なった感があります。同じ会社に勤務していても、他大学出身者はいち早く情報を交換しあうのに対し、かなり時を経過してはじめて同窓であったことを知る人もおります。そのようなこともあってかここ数年、理学部首都圏同窓会をはじめとして県内外在住の同窓生から同窓会の統合について熱いラブコールが学科同窓会に寄せられるようになり、理学部OB会で統合について熱心な討議を行ないました。

また、近年、環日本海圏での経済や文化交流がさけばれ、新潟大学に於いても外国への教官の招聘や留学生の増加等国際交流の一端を担う機会が多くなり、同窓会としても、大学側と協力して社会的貢献をなす基盤の育成が急務となってきました。これまでも、新潟大学では、地方文化の中核として国際交流事業等幾つかの社規的要請があり、各学部および同窓会が一体となって応えてきました。しかし、より効率的に対処するためには、少なくとも同窓会窓口の一本化が活動の実際に合致し、他学部同様に本来の姿に戻そうという考えが出てきました。以降、統合成立迄の経過については、「経過報告」の項を参照してください。

一度壊れたものは、元に戻そうとしてもなかなか困難を伴うものであります。理学部同窓会も例外ではありませんでした。理学部同窓会の場合は、各学科同窓会に分かれてから十数年経過しており、学科によっては、学科同窓会の独自の活動が定着していることなども統合を困難にしている要因の一つになっていたようであります。即ち、各科同窓会の活動状況の差や違いがあり、それらを解消するには時を必要とします。今回、各科独自の活動をできるかぎり損なうことの無いよう連合型統合というべきものになりましたが、いくつかの難題を先送りしてきております。ともかく、念願の同窓会の統合が実現いたしました。皆さんと共に育てていきたいと存じます。

理学部同窓会の役員会では、早速検討課題に取り組みを始め、順調に運んでおります。会報の発行を始めとして、来年三月には、学科毎の同窓会名簿ではありますが様式を統一して必要あらば合本できる形で発刊を予定しており、各科同窓会で取り組みが始まっていることと存じます。すぐには完全なものは期待できないと思いますが、五年毎に名簿の発刊を考えておりますので、皆さんのご協力に

より、より充実したものにしてゆきたいと存じます。

同窓会費につきましては、しばらくは現状でいくことになると思います。現在学科同窓会毎に卒業時に終身会費として納入をお願いしているところが多いようですがこのやり方では将来的に学内の同窓生の負担が問題となってくることが考えられます。会費は同窓会運営の主要財源であり、安定した収入が望まれます。どのような事業を企画するかにもよりますが、何時、どのような方法で、いくら納入してもらうか、将来的に終身会費としてやっていけるかなど、問題点が多く残っております。どうか忌憚のないご意見をお寄せ下さいますよう、ご協力・ご援助をお願い致しまして、ご挨拶といたします。

平成四年盛夏

同窓会の発展を祈る

名誉会長　植村　武

昨年十月の同窓会発足以来、既に九ケ月余りたちました。名誉会長に推挙されながら何一つお役に立つこともないままで、内心忸怩たるものがあります。

理学部発足以来満四十三年、西大畑から五十嵐へ移転して満二十二年、卒業生約四千名、五学科（これは発足時と同じ）二十六講座に臨海実験所、大学院修士課程五専攻という現状に発展してまいりました。しかし、今や理学部も二十一世紀の基礎科学を目指して今後の展望を切り拓くために自らを改革する必要に迫られ、同窓生各位のご期待にも応えるべく、日夜非常な努力を続けています。

学部長の任期、したがって名誉会長の任期は来年の三月末で終わります。ご存知のように毎年三月二十日頃に卒業式が行なわれ、そのあと、学部毎に祝賀会が開かれるのですが、これからはその際、必ず同窓会に連絡して会長のご出席をお願いし、卒業生にお祝いの言葉をいただき、また理学部同窓会のことについてもお話下さるようにしたいと考えています。

おわりに、理学部同窓会のいっそうの発展を祈ってやみません。

総会報告

一九九一（平成三）年十月二十七日（日）、あいにく雨が降ったり止んだりの肌寒い日、昼過ぎから会場である新潟ミナミプラザホテル二階に、ぼつぼつと同窓生が集ってきた。出席者はほぼ百四十名。各学科別に受け付けをし、数学科約三十名、物理学科約二十名、化学科約四十名、生物学科約三十名、地質鉱物学科約二十名であった。

定刻午後一時をやや過ぎて、物理学科一回生遠藤氏の司会で総会が始った。開会宣言の後、総会の議長に数学科一回生、名簿番号も一番の有磯氏を推薦して承認され議事に入った。先づ、化学科十一回生逢坂氏が、経過報告と会則案の提案を行った。氏は化学科同窓会の事務局を担当するかたわら、今回の準備委員会にも加わって精力的にこの日まで仕事をしてきたのであった。別項経過報告にあるように、理学部として一本化した同窓会が存在する必要性が説明され、これまでの論議の要点を簡潔に報告された。その上で、会則案をまとめるにあたっての問題点、考慮した点などの説明があった。既に存在し、活動している各学科の同窓会の自主性をそこなわず、少くとも対外的には新潟大学理学部同窓会として一つの看板をかけたいというのが最大の目的であった。今後の運営で反省、改善をなしつつ解決すべきことがらもあり試行錯誤も止むをえないものとも思われる。質疑の中で建設的な意見も出たが、修正案はなく会則が承認され即日施行となった。

有磯議長が理学部同窓会の発足を宣言した。次いで同窓会長として、今までの準備委員会でも中心的な仕事をしてきた、化学科一回生で、化学科同窓会長でもある、渡辺昌吾氏を推薦し、承認された。渡辺氏からは、理学部の卒業生が送り出されはじめて以来の経過を考え、今後はまとまった活動に力を注ぐ旨の決意をこめた挨拶があった。化学科以外の四学科の同窓会長を、理学部同窓会の副会長に委嘱する提案があり、紹介された。

当日、来賓として地質鉱物学科との縁も深い、新潟大学学長の津田先生が出席され、発足総会に祝辞を述べて下さった。その中で、ご自身が、ある同窓会の会員である体験から、会報のようなものが定期的に届けられるのが、同窓会員としてたいへん意義があると思うので、本同窓会にも会報の発行を勧められた。また現理学部長植村先生もお祝いに参会されたが、後の祝宴でご挨拶をいただいた。規約により名誉会長をお願いし引き受けていただいた。役員としては監事二名を選出し、また各学科から五名ずつ計二十五名の幹事はプリントで紹介された。議事は順調に進み、ほぼ二時頃、地質鉱物学科八回生の中山氏の閉会宣言で総会は終った。

十五分の休憩の後、隣室に用意された会場で祝賀会に移った。生物学科一回生の南雲氏の司会で、新しく就任した渡辺会長の挨拶、名誉会長である植村理学部長のご祝辞と乾杯の音頭で祝宴ははじまった。理学部としてまとまって開く宴会もまた楽しいもので、横のつながりをとりもどし懐旧談にふける人の輪があちこちにできた。聞くところによると新潟大学首都圏同窓会という会合があり、東京及び近辺に住む新潟大学全学部の同窓生が毎年一回一堂に会して宴を催し、時には会報を刊行しているのが、参考になる事例かもしれない。

約二時間、楽しい雰囲気の中で送った後、広川副会長（生物）の万歳三唱でお開きになった。生物学科は全員で別席に移動したが、いくつかのグループの二次会もあったようだ。夕方五時、会場に人影はなく、外は晩秋、鉛色の雲が一面を覆っていた。

役員紹介

（敬称略）

数学科

有磯邦男（副会長）

「幹事」
田中　謙輔　　磯貝　英一
野尻　和子　　吉川　益男
高橋　芳延

物理学科
遠藤　昭一（副会長）

「幹事」
矢野　教　　加藤　義雄
高橋　利保　　金子　恒雄
石田　昭男

化学科
渡辺　昌吾（会長）
写真前掲

「幹事」
鈴木　俊雄　　洞口　高昭
佐久間一誠　　逢坂　勝也
植木　幹雄

生物科
広川　豊康（副会長）

「幹事」
南雲　照三　　曽我　浩
田中　秀夫　　青木　茂治
小林　道頼

地質鉱学科
中山　輝也（副会長）

「幹事」
米沢　富信　　若井　省吾
若林　茂敬　　高浜　信行
田沢　純一

「監事」
和田　左苗（物理学科）
小田　武夫（数学科）

経過報告

「統合」の動きが出て以来、「理学部同窓会」は実に四年間、二十数回の審議を重ねて誕生した。

「ゆるやかな連合体とし、各学科独自の活動は制限しない」ことでようやく学科間の合意が得られるという難産であったが、これにより、今後新たな活動の展開が期待出来るものと思う。

発足までの経過を記す。昭和六十年有磯邦男氏（数一回）の県教育長就任に伴い、「氏を励ます理学部OB会」が開かれた。この際、これまで散見されていた「同窓会一本化」の声が一挙に騰騰した。これを受け、二年後の同会において、渡辺昌吾氏（化一回）から統合について提案がなされ、「検討委員会」の設置が満場一致で了承された。

「検討委員会」は、その後審議の進展に合せて「準備委員会」、「発足準備会」と改称、委員を充足しながら、統合に向けて学科間の意見調整が進められた。特に時間をかけた内容は、統合の形態・事業内容と予算規模・会費徴収方法・事務局の所在と業務内容などである。他に統合の意義（趣旨）についても繰返し論議された。

「発足総会案内書」に統合についての趣旨が三つにまとめられている。一つは、同窓会が大学と一体となって、国際交流事業など社会の要請に応えていくためである。二つは、学部が施設設備・教授陣・研究などの面でめざましい発展を遂げている現在、これにふさわしい同窓会活動を行うためである。三つは、首都圏同窓会をはじめとして県内外の同窓生から、統合について強い働きかけがあったからである。事務局を担当した者として、敢えて四つ目を付け加えるとすれば、それは学部黎明期に学んだ同窓生諸兄の「西大畑校舎時代」に対する断ち難いノスタルジアであったと思われる。

一～四回生が統合という難業をなし遂げた。これに継ぐ同窓生が充実発展させることを祈りたい。

（逢　坂）

理学部の近況について

理学部も昭和二十四年の創設以来四十二年にもなり、卒業生も随分と多くなりました。こゝでは近況と云っても紙面の都合で詳しく述べられませんので、昭和四十年頃からの講座増と学生数について述べることで発展状況の説明とします。

数学科

昭和四十年に修士課程が設置され、学科目制から講座制となり、解析学講座、位相解析学講座、代数学講座、幾何学講座の四講座が設置された。さらに四十八年に情報数学講座が新設され五講座となって現在に至っている。学生定員は、修士十名、学部は臨時増を含めて三十五名となっている。

物理学科

昭和四十三年に大巾な拡充改組があり、量子物理学・原子物理学・高エネルギー物理学・分子物理学・物性物理学・結晶物理学・固体物理学の七講座が開設された。研究面の上では、従来の講座の枠にとらわれない研究グループが組織されて活発に研究が行われている。さらに、六十二年からは素粒子物理分野が独立し、現在理論が三、実験が四グループとなっている。学生定員は現在臨時増を含めて五十五名となっており、さらに平成五年度からは宇宙物理学関係の講座が設置される予定である。

化学科

昭和四十一年度に発展著しい生化学領域をカバーするために、生体物理化学講座が増設された。さらに四十六年から無機化学系講座の充実のために、無機分析化学講座は無機化学と分析化学の二講座に分離して、五講座となった。さらに、化学科の将来計画の一環として要求していた「凝縮系化学」講座の新設が今年度認められて、現在六講座となって発展の一途をたどっている。学生定員は臨時増を含めて四十五名となっている。

生物学科

昭和四十年には、植物形態・細胞学講座、動物生理・生物化学講座、発生・遺伝学講座に加えて新たに植物生理学講座が新設された。さらに五十一年度からは免疫生物学講座の増設があり、現在生物学科は五講座となっている。学生定員も臨時増を含めて三十名となった。

地質鉱物学科

地質学講座と鉱物学講座の二講座であったのが、昭和四十二年に応用地質学講座が新設された。さらに四十四年には理学部附属施設として、地盤災害研究施設が開設された。五十三年には岩石鉱物学講座が開設されて、四講座になると共に、研究施設は積雪地域災害研究センターに格上げされ現在に至っている。学生定員は二十名となっている。

大学院について

昭和六十年に理・工・農の三学部を基礎とした大学院博士課程（物質科学専攻）が設置され、六十二年までに他の三専攻も加って、自然科学研究科博士課程として発足した。これにより理学部は修士課程と共に増々活発な教育研究活動が行われている。

（学内幹事記）

お知らせ（事務局）

「題字」

〝会報〟の文字は、前学長津田禾粒先生にお願いしたものです。

「総会会計報告」

下記に概略をお知らせします。

残金につきましては、各科に分配せず、理学部同窓会の活動資金に繰り入れさせて頂きました。ご了承のほどお願い致します。

総会会計報告

収　入		**860,870円**
（内訳）学科別分担金		118,780円
	数	31,070
	物	15,170
	化	28,420
	生	24,450
	地	19,670
・会　費		742,090円
	振込み 134名	662,090
	現　金 16名	80,000
支　出		**716,056円**
（内訳）総会案内他印刷		82,709円
・総　会		32,857円
	名札ラベル	412
	会場費	16,995
	看　板	15,450
・祝賀会		600,490円
差引き残高		144,814円

新潟大学理学部同窓会会則

第一章　総　則

第1条（名　称）　本会は、新潟大学理学部(以下本学部と云う)同窓会(以下本会と云う)と称する。

第2条（目　的）　本会は、会員相互の親睦をはかり、本学部の発展に寄与することを目的とする。

第3条（事務局）　本会は、事務局を本学部（新潟市五十嵐2の町8050）内に置く。

第二章　会　員

第4条（会　員）　本会は、本学部各学科同窓会の連合体として、次の会員をもって構成する。

一　正会員　本学部卒業者、大学院理学研究科終了者及び役員会の承認を得た者。

二　特別会員　本学部に特別の関係を有する者で、本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者。

第5条（支　部）　本会は、必要に応じて支部を設けることができる。

第三章　会　議

第6条（会　議）　本会の会議は、総会および役員会とする。

2　役員会は、会員、副会長及び幹事をもって構成する。

第7条（招　集）　総会および役員会は、会長がこれを招集し、その議長は別に選出する。

2　会長に事故があるときは、副会長がこれに代わる。

第8条（開　催）　役員会は年1回開催し、必要な事項を議決する。

2　総会は、役員会において必要と認めたときこれを開く。

第9条（議　決）　役員会は各学科幹事2名以上の出席をもって成立し、出席者の過半数をもって議決する。

2　総会は、出席者の過半数をもって議決する。ただし特別会員は総会において議決権を有しない。

第四章　役　員

第10条（役　員）　本会に次の役員をおく。

一　名誉会長　1名
二　会　長　1名
三　副会長　4名
四　幹　事　25名
五　会計監事　2名

第11条（名誉会長）　名誉会長は、新潟大学理学部長をこれに推す。

第12条（会長および副会長）　会長は、役員会の推薦により、総会において選出する。副会長は会長が委嘱する。

第13条（幹事は、正会員の中から各学科ごとに5名を選出する。

第14条（会計）計）　役員会は、会計2名を選出する。

第15条（会計監事）　会計監事は、総会において選出する。

第16条（任　期）　役員の任期は次期総会までとし、再任を妨げない。

第五章　会　計

第17条（会　費）　本会入会のときは、会費を各学科同窓会に納入するものとする。

2　会費の額は、役員会で決定する。

第18条（寄　付）　本会は、運営に要する経費にあてるため、会員その他から寄付を受けることができる。

第19条（経　費）　本会の運営に要する諸経費は、役員会で決定した各学科同窓会分担金・寄付金・その他の収入をもってこれにあてる。

第20条（会計年度）　本会の会計年度は、4月1日より翌年3月31日までとする。

第21条（会計報告）　本会の収支決算は役員会に報告し承認を受けるものとする。

第六章　附　則

第22条（会則改正）　この会則の改正は総会の承認を得なければならない。

第23条（雑　則）　この会則に規定しない事項については役員会でこれを定める。

2　この会則の運用にあたっては運用細則による。

3　本会は、各学科同窓会独自の活動はこれを制約しない。

第24条（通知義務）　本会の会員は、その住所、氏名、職業または勤務先に変更があるときは、本会事務局に通知するものとする。

平成3年10月27日

「各科同窓会事務局連絡先」

数学科
〒九五一新潟市学校町通二番町
新潟中央高等学校内　高橋芳延

物理・化学・生物学科については、理学部内各学科同窓会幹事宛てになっています。また、地質鉱学科については
積雪地域災害研究センター内
高浜信行

新潟大学理学部所在地
〒九五〇―二一
新潟市五十嵐二の町八〇五〇

「住所資料提供について」

名簿発行予定につき、住所・勤務先等掲載事項変更の場合、速やかに各科事務局へお知らせください。また、前回名簿の連絡先不明者について、判明の場合もお知らせください。